

た。このクローンにより出来た造林地は驚異的な成績を示している。ユーカリは成長が早いので、育種改良効果の判定、評価も他樹種に較べて早く出来、アラクルス社の場合は、パイオニアの存在でもあったが、試行錯誤を重ね乍らも6年間で大きな飛躍を遂げ、さらに引き続いて研究のネットを広げつつある(図-2及び表-2参照)。

この業績は世界的にも評価されて、アラクルス社は、林業、林産界におけるノーベル賞とも云うべき、1984年度の「Marcus WALLENBERG 賞」に輝いている。

あ と が き

本誌の前身「熱帯林業」No. 45(1977年7月)で、「フロニブラ」の立上り段階を紹介させて頂きたいきざつから、編集委員会よりのご要請は「フロニブラのその後」ということであったが、上述の次第でフロニブラは実質的に「セニブラ」に変身しているため、そのいきざつを中心にご紹介した次第である。

セニブラは自らの手で社有林経営に手をつけたばかりであり、今回の拙稿では、その林業的内容について特に掘り下げてご紹介出来るものが無く、本誌の趣旨に充分添い得なかった点をご容赦願いたい。

新刊紹介

◎ニュージーランドの樹木 (J. T. SALMON : The Native Trees of New Zealand. A. H. & A. W. Reed Ltd. A4判, 384 pp. 1980 (価格不明))

ニュージーランドは熱帯とはいえないが、木材の取引などでわが国との関係が最近ますます深くなっており、ここの樹木についての知識を得ることは意味があるので紹介しておきたい。内容ははじめの数10ページにニュージーランドの森林および樹木に関する概説があり、あとはニュージーランドに自生する220種余りの樹木(単子葉樹木および木性シダも含む)が1種ずつ記載されている。本書を開いてまず感嘆するのは写真のすばらしいことである。すべてカラーで、樹種ごとに樹形、樹皮、葉、花、果実等がのせられており、その数は1種につき10~20枚にもおよんで、例えば葉であれば表面と裏面、成葉と幼葉、花や果実でも全体と接写が成熟の過程も含めてとられている。しかも1枚として“ピンボケ”写真がない。こんなに見事な樹木の写真の本は私にははじめてで、これをとるには相当の苦勞と年月がかかったと思われるが、それをなしたのがヴィクトリア大学名誉教授の著者自身であるらしいのも驚きである。そのためニュージーランドのすみからすみまで歩いたという。もちろん個々の樹木の解説も写真に匹敵してよく書かれている。もうひとつ、ここにのせられているほとんどの樹木が日本とは関係のうすい南半球の種類なので、この意味でもばらばらめくるだけで楽しい本である。なお印刷は日本の共同印刷である。(緒方 健)